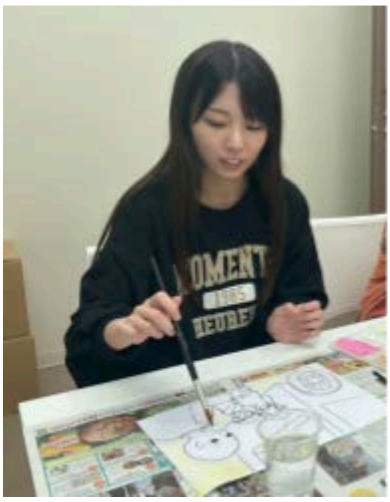
311ゼミナール2025年度第7期

次世代伝承班

活動報告書



第7期 次世代伝承班・活動メンバー

G5080　後藤美姫　3年	G5079　後藤咲佳　3年
G5179　星陽菜乃　3年	G5130　関町咲穂　3年
G6225　渡邊穂香　2年	G6183　深澤このみ　2年

目次

1. 活動の概要

2. 活動の詳細

2-1.震災遺構・紙芝居による伝承活動の視察

〇震災遺震浪江町立請戸小学校の視察

・調査の目的
・現地調査の行程
・浪江町（請戸地区）について
・浪江町立請戸小学校について
・展示内容
・先人の丘
・学んだこと

〇「浪江まち物語つたえ隊」八島妃彩さんからの聞き取り

・浪江まち物語つたえ隊について
・視察の概要
・伝承活動の様子
・浪江まち物語つたえ隊代表　八島さんへの聞き取り
　・伝承活動への思い
　・紙芝居による伝承活動への手ごたえと課題
　・今後の展望

〇二つの活動を視察してのまとめ

2-2.メンバーの被災・避難体験を紙芝居化するプロジェクト

・経緯
・第6期でできたこと
・第7期でできた
・制作過程
・学んだこと

3.活動全体からの考察と今後の展望

4.メンバーの振り返り

1. 活動の概要

私たちは2023年度第5期から、「東日本大震災を知らない世代に、出来事と教訓をどう伝承していくか」をテーマに活動してきた。

第5期では、当時子どもだった人たちの被災体験と思いを漫画にまとめ、伝えている公益社団法人3.11メモリアルネットワークの活動を視察し、現地での語りと漫画による伝承の違いや成果について考察した。同時に、グループメンバーの被災・避難体験を紙芝居化するプロジェクトにも取り組み始めた。

2024年度第6期は、紙芝居や絵本等による伝承の現状を調べることを目標に、実際に紙芝居や絵本を使って伝え継ぎをしている個人やグループの活動を視察し、聴き取りを行った。加えて、岩手・宮城・福島でそのような活動がどれぐらいあるのかをネット上で調べて、その意義を考察することにした。5期から始めた「メンバーの被災体験を紙芝居化するプロジェクト」については、シナリオ作成まで進めた。

2025年度第7期は、「メンバーの被災体験を紙芝居化するプロジェクト」を完結させることを目標に、紙芝居を使って伝え継ぎをしている個人やグループの活動を視察し、聴き取りを行った。それを活かして紙芝居のシナリオ、絵画の作成で試行錯誤を重ね、最終的に紙芝居「あの日私は」を完成させた。

2. 活動の詳細

2-1.震災遺構・紙芝居による伝承活動の視察・聞き取り

■震災遺震浪江町立請戸小学校の視察

(1)調査の目的

本調査は、「浪江まち物語つたえ隊」八島妃彩さんにお話を聞く、そして紙芝居を披露していていただくにあたって、浪江町のことを事前に知っておく必要があると感じたため視察実施が決定された。また、実際にその場に足を運ぶことによって、浪江町の歴史や請戸小学校、そして当時の人々の暮らし、震災後から今日までの苦悩や葛藤を肌で学び、感じることができると考えた。そしてもう一つ、教員になる私たちは教員の目線で学ぶことも大事であるため、そういった部分も目的の一部である。

(2)現地調査の行程

福島県浜通りに位置し、双葉郡に属する浪江町の視察は以下の行程で実施した。

日程:2025年8月28日(木)

7:30	宮教大 防災教育研修機構前　発
8:00	仙台駅東口　福祉大前
9:00	休憩(鳥の海PA)
10:00	震災遺構・浪江町立請戸小学校　着

11:00 11:30	視察 請戸小・避難経路実地踏査 徒歩 先人の丘　→　大震災慰霊碑 弔意・視察 大震災慰霊碑から公用車で道の駅なみえへ移動。
12:00	昼食休憩
13:00 15:00	浪江まち物語つたえ隊　代表:八島妃彩　様より講話
16:15	休憩
17:15	仙台駅東口
17:45	宮教大 着・解散

(3)浪江町(請戸地区)について

福島県浪江町(なみえまち)は、福島県浜通り(沿岸部)の北部に位置し、双葉郡に属する。海、山、川に囲まれ、豊かな自然を誇り、大堀相馬焼やなみえ焼そばといった名産品で有名である。請戸地区は浪江町の沿岸部に位置する地区で、太平洋に面した歴史ある漁港の町で暖流の黒潮と寒流の親潮が交わる「潮目の海」に面しており、日本でも有数の豊かな漁場として知られている。東日本大震災の津波により浪江町内の請戸地区は、死者が127名、行方不明者27人と多くの犠牲が出た。

(4)浪江町立請戸小学校について

海から約300mに位置する請戸小学校には、校舎2階の高さまで津波が押し寄せたが、教職員と児童全員が学校から約1.5キロメートル離れた大平山に無事避難することができた奇跡の学校として知られている。

(5)展示内容

津波で被災した校舎がそのまま残っていた。天井が剝がされた様子、複合盤が壁から引き剥がされた様子、調理場で使われていた機器類が北側の部屋へ押し流されて積みあがっている様子、校長室の頑丈で重い金庫が流されて倒れた様子、体育館の床に大きな穴が開いた様子など、津波による生々しい傷跡が見受けられた。展示を見る順路があり、3月11日当日の被害や避難の流れを追いながら、説明文を読んで展示を見れるようになっていた。紙芝居のイラストも説明文と一緒に付いていて、見学していて当時の状況を理解しやすかった。

また、紙芝居のイラスト本や震災被害に関する資料を自由に見れるスペースがあったり、震災当時まだ幼かった子どもが大人になって東日本大震災の時のことや請戸のことをどう思っているか、考えているのかを書いた作文が展示してある教室があったり、黒板に当時の寄せ書きが残っていたりして、震災前の町の様子や震災当時のことだけでなく震災後の取り組みや人々の想いまで学べる展示になっていた。

(6)先人の丘

請戸共同墓地があった場所だが、大津波により甚大な被害を受けた。平成27年3月に町営大平山霊園を高台に整備し、多くの方がお墓を移したが、請戸共同墓地に埋葬されていた請戸地区を支えてきた先人の方々を敬うために整備されたのが、「先人の丘」である。この丘には、津波により被災した請戸共同墓地の墓石等が眠っている。この先人の丘が、請戸地区にお住まいであった方やご縁のある方々にとって、この地に眠っていた先人たちに想いを馳せる場所になっている。私たちはここで震災で亡くなった方々に想いを馳せて手を合わせた。

(7)学んだこと

請戸小学校は震災遺構として校内の一部を改築し、そのほかを現存の状態で残した形になっていた。海から300mほどに位置しており、校舎の2階から海を見渡すことができた。入場してすぐに、浪江町・請戸地区の歴史についてがボードでまとめられており、震災前後の行事の様子や地域住民の暮らし、そして請戸小学校の成り立ちについて学ぶことができた。私がここで興味を惹かれたのは校舎のモチーフがクジラや海を見渡す展望台であることだ。海に近い学校・地区であることが理由だとわかる。震災で海の恐怖の面が多く刻まれるが、海と共にあるこの町に来ると海の良さにも触れられる機会であった。

次に被災した状態で残されている校舎を視察した。校舎に入る前の道の壁に、防災マップが貼られていた。この防災マップには自動車と徒歩で避難した場合の時間が記載されていた。ここから、様々な場合を想定している点は活用できると感じた。校舎内を巡り、観察していたときに教室から校庭までの逃げ道についての記載があった。地震後の避難時にプールの水が溢れていたため正式な避難経路が断たれた。このとき、教師のとっさの判断により保健室の中を通るという決断が下された。私はここの教師の判断はマニュアルでは対応しきれない部分であることを理解した。今までの被災地視察でも、避難訓練の内容やマニュアルについて考える機会が多くあったが、毎回思うのはマニュアルがすべて正しいと思わないこと、マニュアルに対して疑問を常に持つこと、想定外のことが起こっても対応できる心構えを持つことなどだ。大きな災害には猶予がない、だからこそ日頃の積み重ねが大事だ。

■「浪江まち物語つたえ隊」八島妃彩さんからの聞き取り

(1)浪江まち物語つたえ隊について

前身にあたる活動は避難所生活の中で生じた人々の孤立感に対し、紙芝居を通して心の癒しやつながりを提供することを目的としていた。広島県からのボランティア団体と協力しながら紙芝居の発表、制作を行っていた。2014年、「ふるさとの記憶や思い出を紙芝居で語り継いでいこう」という浪江町民の思いから浪江まち物語つたえ隊は発足した。東日本大震災の記憶だけではなく、原子力発電所の事故、震災以前、以後の暮らしについて語り継ぐことを目的としている。

(2)視察の概要

本視察は、自分たちが震災を題材とした紙芝居を制作するにあたり、実際に語り部活動を行っている団体からお話を聞き、表現方法や伝承のあり方について学ぶことを目的として実施した。視察団体は「浪江まち物語つたえ隊」であり、実施日時は2025年8月26日である。参加者は学生5名、教員1名であった。当日は、浪江まち物語つたえ隊による紙芝居「無念」および「奇跡の請戸小　避難物語」の上演を見学した。その後、代表である八島さんから、紙芝居制作の背景や語り部活動に込めた思いなどについてお話を伺った。

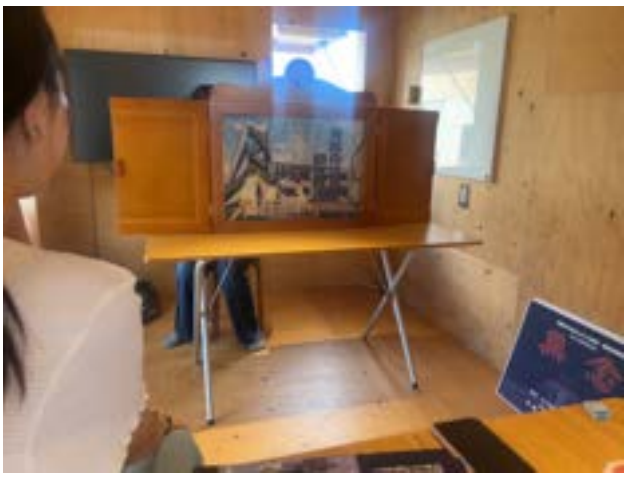
(3)伝承活動の様子

披露していただいた紙芝居は2本である。

《1本目の紙芝居》

イラスト	表紙は浪江町立請戸小学校を背景に、青い文字でタイトルが書かれており、小学校に向かって子どもたちが走っている様子が描かれている。
紙芝居のタイトル	「奇跡の請戸小 避難物語」
シナリオ	①タイトル、請戸地区の被害や「請戸小学校の奇跡」についての簡単な説明 ②地震発生前の1年生の様子 ③地震発生前の2、3年生の帰りの会の様子

	④地震発生前の4、5、6年生の様子 ⑤地震発生時の教室での様子 ⑥地震が収まり、校庭に出るように指示が出る。 ⑦地震発生時、体育館にいた5年生の様子と主人公の説明 ⑧道路が川のようになっているなど、情景描写がセリフで行われ、裏庭に集まるように指示が出る。 ⑨途切れ途切れの大津波警報が流れ、人々は津波が来ると知る。 ⑩大平山に避難を始め、校長は役場へ向かう。 ⑪車いすに乗っている主人公が懸命に車いすを漕いでいる。 ⑫介助員や他の児童と協力しながら砂利道を進む。 ⑬保護者が児童を家に連れて帰ろうとするが、共に避難するように説得する。 ⑭車いすが通れない山道にたどり着き、主人公は担任に背負われ、他の児童が車いすを運ぶ。 ⑮低学年が高学年を励ましている。 ⑯津波が請戸地区を飲み込む。教師が子どもたちには津波を見せないようにしている。 ⑰一度休憩する。 ⑱通りかかった大型トラックの運転手に荷台に乗るように言われる。 ⑲小さい子どもから順番に乗せてもらい、役場へ向かう。 ⑳役場へ到着し、町の体育館で一夜を迎える。 ㉑避難開始から福島第一原発事故発生、全員の安否確認まで ㉒津波で亡くなった人、仲間たち、背負ってくれた先生の背中のぬくもりを忘れない。
言葉遣い	方言
紙芝居の枚数	22枚
紙芝居の時間	約19分
話す速度	基本的にゆっくり　伝えたい言葉は特にゆっくり
声色	セリフにはとても感情がこもっている。説明部分は落ち着いた話し方をしている。
その他	地震の効果音を発しながら紙芝居を引き抜くという工夫がなされていた。



《2本目の紙芝居》

イラスト	表紙は赤文字で大きく「無念」と書かれており、 夜の町を消防団の方が背を向けて見ているイラストが描かれている。全体的に見やすくはっきりとした色と線で構成されている。
紙芝居のタイトル	「無念」
シナリオ	①震災後14年、毎日浪江に祈るおじさん ②タイトルに戻り、東日本大震災の説明と浪江町消防団の物語であることの入り。 ③消防団の震災時の活動 ④救助をする消防団 ⑤消防団の救助中断が発表され朝まで待機を命じられる ⑥別の場所から救助要請があり救助に向かう ⑦その後、明け方まで休息を命じられる。 ⑧原発事故により、請戸地区は立ち入り禁止に。 ⑨救助活動は消防隊員と自衛隊にゆだねられたが、ついに原発爆発が起こり避難を余儀なくされる。 ⑩数日後、助けられた命を助けられなかったと悔やむ消防団の方々。 ⑪10年たった今でも苦しむ消防団。救えたのにという無念はいつまでも残っている。 ⑫原発という見えない恐怖、少しでも理解が深まることを願っている。
言葉遣い	方言
紙芝居の枚数	約15枚
紙芝居の時間	約15分
話す速度	ゆっくり
声色	子ども、女の人、男の人、ナレーションで声色を変えている。

その他	感情が籠っている。 慌てている場面で机を揺らす。

(4)浪江まち物語つたえ隊代表　八島さんへの聞き取り

浪江まち物語つたえ隊の代表を務めている八島さんに活動への思いや紙芝居の成果についてインタビューを行った。

〈伝承活動への思い〉

NHKで取り上げられたことで全国に活動が報道され、各地を回る活動も始まった。活動が広がるに連れて自分やメンバーの話を元に紙芝居を作成してもらったが、最初の頃は当時のことを思い出し、こみあげてくるものがあって読めなかった。

子供からお年寄りまで幅広い年代を対象として活動を行っている。対象者に合わせて紙芝居を選んだり、読み方を変えたりという工夫をしている。浪江町がどのような町だったのかということを伝承することも目的としているため、浪江町の昔話を読んでから震災の話を読むこともある。

〈紙芝居による伝承活動への手ごたえ〉

紙で書いてあるものであれば誰でも読めるため、次の世代に繋げやすい。震災を体験をした人がいれば震災について細かく話をすることができる。しかし、震災のことについて知りたいと思ったときに体験した人が必ずいるとは限らない。紙芝居があれば読み聞かせによって震災の記憶を伝

承することができる。自分が歳をとって引退するということになっても、伝承活動に興味がある人がいればその人たちに紙芝居を託すことができる。

〈今後の展望〉
公民館事業を連携し、新たな語り部たちに向けて講習会を行っている。6回の講習会を開催し、最後には紙芝居の発表を目指している。講習会では紙芝居のモデルとなった方にお話を伺ったり、避難区域での見学を行ったりした。自分なりの表現で紙芝居の実演を行いたいという方や、請戸小学校で働いている職員などが12月の発表に向けて練習を行っている。また、語り部活動も引き続き行っていく。

■二つの活動を視察してのまとめ

今年度は一か所のみの視察だったが、班員皆が初めて訪れる場所であったため、学びが深く濃い時間を過ごすことができた。浪江町請戸地区は地震、津波、そして原発事故と多くの被害を受けた地域であり、以前訪れた福島第一原子力発電所での知識や懺悔の気持ちを踏まえながら展示を見て回り、また宮城県での被災との比較や復興の様子の違いなどを考えることができた。そして小学校での被災の出来事を学ぶことで、教員としてすべきことやこれからの未来について、自分たちが伝承していかなければいけないと強く思うことができた視察であった。
そして「浪江まち物語つたえ隊」の八島妃彩さんのお話を直接聞くことで、大きな学びを得ることができた。紙芝居を実際に何年も実演してきた方であり、その技術や心得を見させていただき、そして聞かせていただく機会はとても貴重であった。伝承班として、伝承する媒体だけでなく、伝承する方の気持ちや今後の展望は未来を見据える活動として大事な核であり、そういったお話を直接聞くことができたのは、自分たちの活動にも大きな影響を与えてくれた。
今回の視察を通して、自分たちの紙芝居制作はもちろん、今後の活動の指針となる考え方も班員内で共有できたと感じる。ここでの学びを糧に、さらに伝承の意義について深めていきたい。

2-2.メンバーの避難体験を紙芝居化するプロジェクト

(1)経緯

私たち次世代伝承班は一昨年度の第5期で、メンバーの一人である後藤美姫さんの経験を聴き取り、現地を視察し、後藤さんの実家である定林禅寺の後藤隆善住職から聴き取りも行った。
後藤さんは東松島市野蒜が自宅で、幼稚園児として送迎バスに乗っていた時に被災して避難した経験がある。その経験を紙芝居に仕上げ、震災伝承につなげていくプロジェクトを発案し、取り組みを進めた。
本来であれば、昨年度で紙芝居の完成まで達成する予定だったが、他の活動との見合いでそこまではたどり着けなかった。シナリオづくりまで整理したことを記録しておく。

(2)第6期でできたこと(シナリオ)

1)紙芝居を通して何を伝えたいかを考えた

2)後藤美姫さんの経験談を9つに分けた
3)シナリオの骨格

①今の美姫さんの説明
私の名前は「みき」
東松島市の「野蒜」にあるお寺に住んでいるよ。
→名前か場所をぼかす
→野蒜小学校のことなどを伝えるには、具体的な場所の説明が必要になる

東松島市は海が近くにあって、「海苔」が有名な場所なんだ。
ところでみんなは、
　→みんなは2011年3月11日に何があったか知ってる？
「東日本大震災」って知ってる？
昔、私が幼稚園の年長さんだった時、大きな地震と津波があったんだ。
今日は、その時に起きたことをお話するね。

②震災発生前の美姫さんの様子
震災発生前、「みき」は野蒜海岸でよく遊んでいた。
（幼稚園のお泊り会・家族）そのため、海を怖いと思ったことはなかった。その時、津波（地震はやってた）の避難訓練はほとんどしていなかった。
2011年3月11日：幼稚園が終わり、「みき」と「弟」はいつものように幼稚園の帰りのバスに乗りこむ。
いつものようにバスに乗っていると、ガタンとバスが揺れる。

③震災発生時の状況
幼稚園から家に帰るための送迎バスの中で地震が襲った。
運転手さんがバスから降りて
「バスの故障かな？」
最初はそう思ったが、下校中の小学生の男の子が「地震だよ」と教えてくれたのを聞いた。バスの中ではあまり揺れを感じなかった。

④バスで津波から逃げる様子
全職員も乗せてバスにいた園児を送り届けようとしていたが
（自分の家に着いた子が自分の家のブロック塀が壊れてて泣いていた記憶）、途中で避難所に設定されてる野蒜小学校に避難するために移動した。
しかし、駐車場がすごい混雑していた。小学校の体育館は人でいっぱいだった。
もしこのとき野蒜小学校の体育館に入っていたら…。
私を含め、バスの中にいた園児たちは助からなかったかもしれない。バスはもう一度幼稚園に戻ろうとした。道路は大渋滞でバスは動かない。
そしたら、バスの外でこんな声が聞こえた。
「津波だ！逃げろ！戻って！」
男性の声だった。それが聞こえてくるやいなや、バスは向きをくるっと変えて坂を上りだした。

⑤美姫さんが津波を見た瞬間、おじいちゃんと美姫さんが会ってから自宅に着くまで
たくさんの人が逃げようとしていたため、道路は渋滞していた。
窓から後ろを見ていた。二階建ての建物を壊していく茶色い波を見た。
（津波を知らなかった）
進めずにいたところ、祖父がバスのドアを叩き、「帰るよ」と言われた。
「バスを降りたら死ぬ」と思い、泣きながら拒否したが、「弟」と共に、（無理やり）祖父の車に乗せられ、お寺へ帰った。
バスも祖父の車についていく形でお寺へ向かった。

⑥お寺での状況
〈お寺〉簡単な説明だけで終わる
→お寺には十分なスペースがあり、食料があったことなどから避難所のようになっていた。
→余裕があれば、情報をつけ足していく
本堂と本堂に向かう途中にある部屋を避難部屋としていた。
足を伸ばしたい人は廊下で寝ていた。

厨房ではガスが使えたため、ガスコンロでご飯を炊き、婦人クラブの方々がおにぎりを握った。
自分の食べる分以外のおにぎりを取っていく人もいた。
近くの農家の方が持ってきた貯水タンクから飲み水を確保した。
簡易ストーブを持ってきたこともあった。
3月12日、廊下は支援物資で埋まっていった。
毛布の支援物資が届き、一人一枚が基本だったが、三枚持っていく人もいた。避難人数の情報が更新されていないこともあり、毛布の数が足りなかった。
基礎疾患や急な体調不良のための薬を持ってきていない人もいたが、看護学校の教官が偶然いたため、わかる範囲で症状を聞いて薬を処方した。

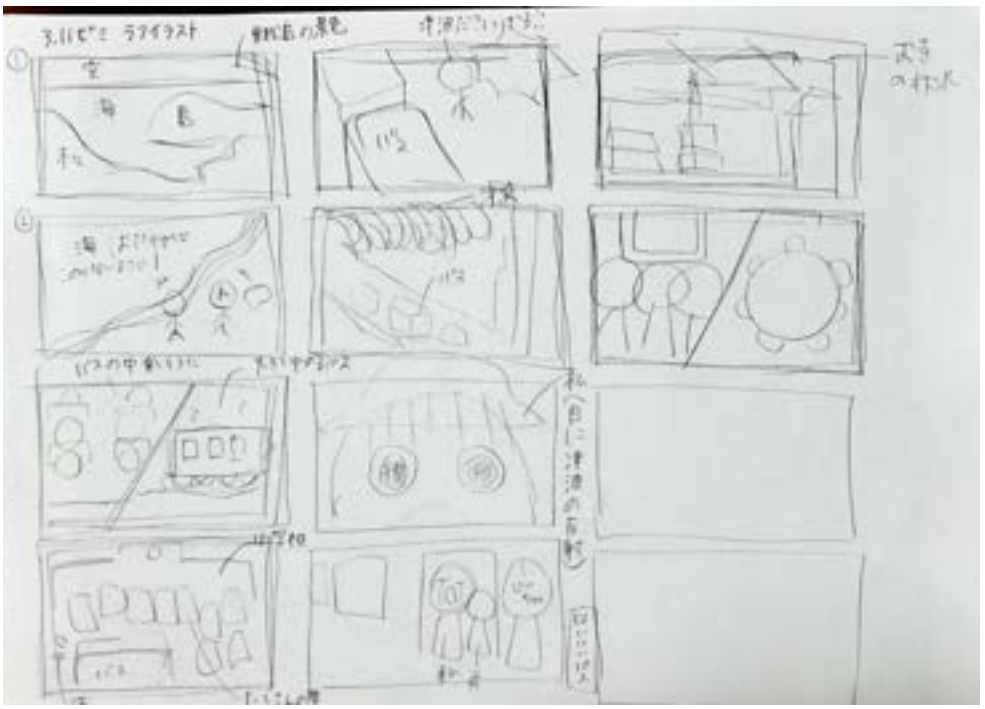
〈みきちゃん〉
自家用車の中でDVDを見ていた。車内には、みきちゃんと兄弟1人、近所の子1人がいた。お母さんは、末っ子である赤ちゃんの子守をしていた。
保護者が迎えに来た子は引き取られ、まだ来ていない子と幼稚園の先生と一緒に余震が続く夜を過ごした。

⑦美姫さんが印象に残っている出来事
バスにずっと揺られて、何が起きているかも全くわからなかったけれど、2階建ての家を壊していく津波がバスの窓から見えて、初めて『死』を身近に感じた。
夜中の余震が続く中で寝ることの怖さ

⑧震災から時間が経ってからの様子
鳴瀬庁舎の一角を間借りして6月位から授業再開(そこで入学式も行なった)
→砂利道を友達と歩いて登校
校庭も少し歩いたところ、体育館も市の体育館
クラスは2クラス合ったけど、教室は1つ
→少ししてからバスで通ったプレハブの2階建て校舎が建つ。そこでの期間が一番長い。
小学校6年生くらいのとき
卒業式は新しい校舎でさせてあげたい！急ピッチで丘の上に新しい小学校が建った。
新しい団地もできて、新しい生活が始まっている。(被災した人の家)

⑨今の美姫さんが伝えたいこと
小さいけれど、恐怖は感じる→説明や安心する何かが欲しかった
避難所だから大丈夫なんてことはない

4)紙芝居の原画イラスト



(3)第7期でできたこと(紙芝居シナリオ・絵画完成)

伝承活動を行っている団体さんへの聞き取り調査、ラフ画作成、着色を進めて美姫さんの経験談を基にした「あの日私は」という紙芝居を完成させることができた。シナリオ・絵画の制作過程については(4)で詳しく述べる。

(4)制作過程

○「浪江まち物語つたえ隊」八島さんの聞き取り調査を受けて

八島さんが紙芝居を披露する際に大切にしていることを調査したところ、以下の5つのことが挙げられた。

①ゆっくりはっきり大きな声で読む
②シナリオは簡潔に作成し、目安は1枚1分で考える
③事前に紙芝居に出てくる地域の説明をする
④紙芝居に出てくる地域の方言を使う
⑤紙芝居を読む練習を行う講習会に繰り返し参加する

私たちはこの中でも①、②、③について参考にさせていただき、紙芝居作成・紙芝居実演を行う上で参考にさせていただくことを考えた。

○シナリオ作成

意識したことは、八島さんから伺った②を参考にして1枚1分弱にできるように内容を簡潔にまとめたことである。また、この紙芝居は小学生に向けて披露することを想定しているため、簡単な言葉で状況を説明できるようにすることと大学生になった美姫さんが語りかけているような柔らかい口調で書くことを工夫した。そして、声色を変えるところや紙を動かすところにも指示を記載し、誰でもこの紙芝居の読み手になれるように作成することを心掛けた。そして、第6期の話し合いでこの紙芝居を通して伝えたいことは「震災時に状況が把握できなかったことで子どもたちが安心できなかったこと」と「避難所だから安心じゃないこと」の2点だと確認していたため、15枚目のシナリオにそれらを明示してシナリオに盛り込んだ。

以下が完成したシナリオの全文である。

①今の美姫さんの説明
私の名前は、みき。宮城県東松島市の、野蒜（のびる）地区に住んでいる大学生だよ。私のお家はお寺なんだ。

②野蒜の海を描いた風景画
私がいる東松島市は海がすぐ近くにあって、美味しい海の幸が有名なんだ。
ところでみんな、東日本大震災って、知ってる？昔、私がまだ幼稚園の年長さんだった時、とっても大きな地震と津波があったんだ。今日は、その時に起きたことをお話するね。

③震災発生前の美姫さんの様子
震災前、わたしはよく海で遊んでいたの。（楽しそうに）
だから今まで、海を怖いなんて一度も思ったことはなかったんだ。

④震災発生時の状況
2011年3月11日、幼稚園が終わり、わたしと弟はいつものように帰りのバスに乗りこんだ。バスに乗っていたその時（紙を揺らす）、**ガタンッ！！！**と大きな音を立ててバスが揺したの。
最初はバスの故障かな？って思ったんだけど、
「地震だよ、地震！」（小学生男児の声）と、バスの外から声が聞こえたんだ。

⑤バスで津波から逃げる様子
それから、バスは避難所になっていた野蒜小学校に向かったんだ。でも、駐車場は車と人でいっぱいだった。もしこのとき野蒜小学校の体育館に入っていたら…。私を含め、バスの中のみんなは助からなかったかもしれない。

⑥男性が手を広げてバスの行き先を阻んでいる様子
バスがもう一度幼稚園に戻ろうとしたそのとき、
「津波だ！逃げろ！戻って！」（男性の声）
外から大きな声が聞こえた。この声を聞いてすぐ、バスは海と反対側に向かおうとしたけど、車がいっぱいでなかなか前に進めなかった。

⑦美姫さんの瞳に津波が映る描写
窓から後ろを振り向くと、二階建ての建物を壊していく、茶色い波が見えたんだ。ただただ怖くて、私は津波から目が離せなかった。（恐ろしそうに）

⑧津波の様子
私が遊んでいた海から10mよりも大きな津波が来たんだ。**ゴォー**っと大きな音を立てて、津波はあっという間に町を飲み込んでいった。

⑨美姫さんのおじいちゃんと美姫さんが会ってから自宅に着くまでの様子
バスが動けないでいると、私のおじいちゃんがバスのドアを叩いた。
「みき、家の車に乗って帰るよ。」（おじいちゃん）

「いやだ、いやだ、降りたくない！！！」(みき)
私は泣きながら叫んだ。弟も隣で泣いていた。その時の私は「バスを降りたら自分は死んでしまう」と思って怖かったんだ。おじいちゃんにバスから降ろされて、私と弟は車に乗ってお寺へ向かった。バスも私の車に続いて避難したんだ。

⑩お寺(美姫さんの自宅)の様子
私のお家はお寺だから、広いスペースも食べ物もあって、地域の避難所のようになっていた。だからお寺には、子どもからお年寄りまでたくさんの人が集まった。キッチンではガスが使えてガスコンロでご飯を炊いたり、近くの農家の人が水を用意したりしてくれたんだ。

⑪お寺での避難生活の様子
車の中で弟と一緒にDVDを見たり、お寺に避難してきたお友達とテーブルを丸く囲んで横になったり…。私はお寺でそんな風に過ごしていた。震災からしばらくは、地震が起きる日々が続いて、状況もよく分からないまま、とにかく不安で、毎日眠れなかったことを今でも覚えているよ。

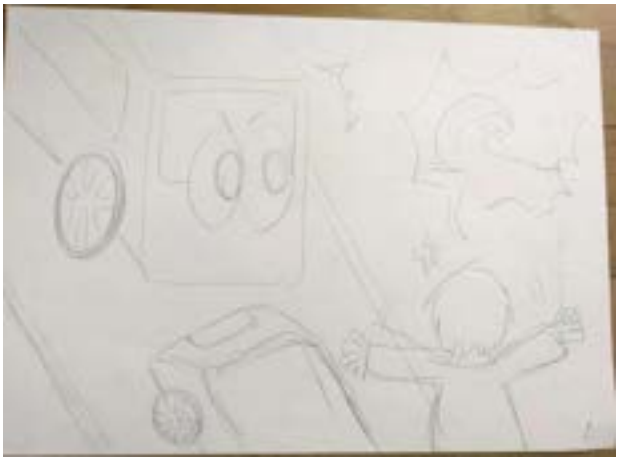
⑫美姫さんがお友達と遊ぶ様子
でもね、こんなに大変なことがあったのに、私はお寺でお友達とたくさん遊んでたんだ。その時感じていた、目に見えない大きな不安を和らげたかったのかもしれないな…。(思い返すように)

⑬震災から時間が経っていく様子
それから私は小学生になった。市役所のスペースを借りて入学式をしたり授業を始めたりしたんだ。それから二階建ての仮の校舎ができて、私が6年生になった時には新しい小学校まで完成したんだ。震災から時間が経つにつれて、少しずつ、新しい生活が始まっていったんだよ。

⑭幼い美姫さんが当時を思い出している様子
2011年3月11日ー。私は当時、あまりに幼すぎて、津波のことも、何が起きているのかも分からなかった。だから、とにかく不安で押しつぶされそうな気持ちだったんだ。もし私がもう少し大きかったら、大人の人たちから地震や津波についてちゃんと話をしてもらえたのかなぁ？…なんて考えたりもするんだ。(思い返すように)

⑮大学生になった美姫さんの様子
これで私のお話はおしまいだよ。みんなはどんなことを感じてどんなことを考えたかな？「子どもたちにも災害について話をしてほしい」「避難所だから大丈夫、なんてことはない」私は震災の経験からいろいろなことを感じたよ。これから時間が経っても、2011年3月11日まだ幼かった私の記憶をずーっと伝え続けていきたいな。

○ラフ画制作
　シナリオを完成させて紙芝居の枚数を15枚と定めたあと、1人1人役割を分担して担当する箇所を2，3枚決め、各自ラフ画を作成した。第6期では原画作成をしたが、さらに詳細なラフ画作成をしたことにより、人の配置や風景を大まかに確認した。班員の深澤さんが中学時代に美術部に所属していてイラストを描くことに非常に長けていたため、人物画を担当してもらうことになった。
以下、実際に班員それぞれが作成したラフ画の一部である。



○準備物の確認

準備物としては、絵の具、画用紙、絵筆、新聞紙、紙コップ、はさみ、のりが挙げられた。特に画用紙はサイズについて検討が必要だったため、宮城教育大学図書館にある紙芝居舞台（紙芝居の時に使う枠のようなもの）に様々なサイズの画用紙をセットし、どのサイズが良いかを考えた。その結果、100均で売っている363㎜×257㎜の画用紙が最適であると分かり、それを採用することに決定した。絵の具はアクリル絵の具にするか水彩絵の具にするか定まっていなかったため、班員の私物や先生に注文いただいたものを使用することにした。絵筆、新聞紙、紙コップ、はさみ、のりも班員の私物を使用した。

○着色
昨年度視察を行ったきずなFプロジェクトの紙芝居には、以下の特徴があった。

イラスト	優しいタッチ 表紙のイラストが特に印象的（主人公の双子の2人が手を繋いでいるイラスト）
その他	・家族の誰かが亡くなってしまう話だったが、　終わった後に心が重くならなかった ・紙芝居と紙芝居のスライド（テレビに映して）どちらも用意していた

※昨年度の報告書から一部抜粋

このことを受け、災害という重いテーマを扱う際には、優しいタッチのイラストを選択するなどして、幼い子どもに適した伝承の形態をとる必要があると考えた。そこで私たちはまず、着色にアクリル絵の具を使うか水彩絵の具を使うか、実際に試して選択することにした。以下がそれぞれの特徴である。

アクリル絵の具	水彩絵の具（＋マーカーで縁取り）
・色ムラができない ・境界がはっきりする ・少しキツイ印象	・色ムラがでる ・境界線が曖昧になる ・ぼんやりとした優しい印象

このような特徴を踏まえ、私たちは紙芝居の着色に優しい印象を与える「水彩絵の具」を選択することにした。また、水彩絵の具では境界線が曖昧になり、遠くからは見づらくなってしまうと考えたため、人物や物をマーカーで縁取りすることにした。

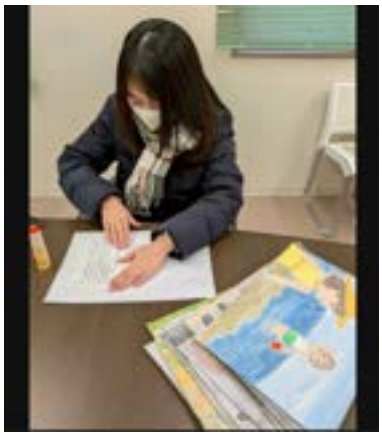
〇その他の工夫
(1)津波の表現

幼いころの美姫さんが見た津波の恐ろしさを表現するためには津波を何色にすればよいか、津波の動きを表現するにはどのように描けばよいか、について吟味した。最終的には、泥の混じった海水を表現するため茶色や黄色を混ぜて泥色を作り着色した。また、色ムラや水しぶきを描くことによって津波の動きを表現した。

(2)タイトル

タイトルである「あの日私は」という言葉を一文字ずつ丸で切り抜き、貼り付けたうえでラミネートを行った。また、最初のスライドは幼いころの美姫さん、最後のスライドは大学生になった現在の美姫さんにすることで、対比的な構造をとった。

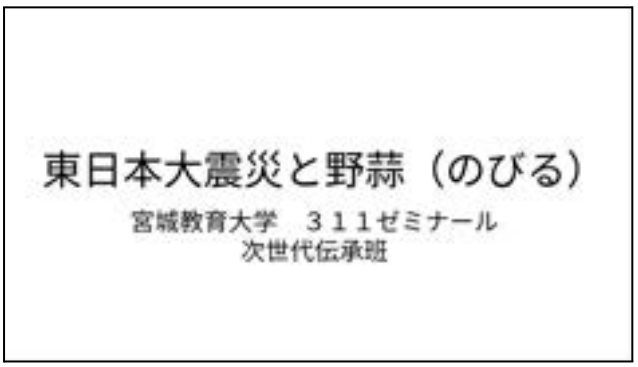
(3)ラミネート



スライドの裏に原稿を貼り付けたうえでラミネートを行うことで、原稿が剝がれてしまうことがないように工夫した。

(4)紙芝居実演前の紙芝居に出てくる地域についての説明

八島さんから伺った③を参考にし、紙芝居実演前に私たちの作成した紙芝居に出てくる東松島市野蒜地区についての説明をするため、パワーポイントを作成した。紙芝居のシナリオの中で、「それから、バスは避難所になっていた野蒜小学校に向かったんだ。でも、駐車場は車と人でいっぱいだった。もしこのとき野蒜小学校の体育館に入っていたら…。私を含め、バスの中のみんなは助からなかったかもしれない。」という文がある。そのため、野蒜地区で野蒜小学校の体育館が指定避難所になっていたこと、そしてそこに逃げた多くの人々の命が失われたことを内容に盛り込むように心掛けて作成した。以下、作成したパワーポイントの一部の画像である。



〇完成した紙芝居
2024年12月末に紙芝居「あの日私は」を完成させた。以下、完成した紙芝居（15枚）である。

〇学んだこと
　紙芝居制作を通して、この紙芝居で「何を伝えたいか」を軸にして制作することの重要性を学んだ。そのためにはまず、美姫さんの被災時の状況を理解し、そこから美姫さんが何を感じ取って何を考えたのかを丁寧に調査する必要があった。そこで、私たちは第6期で既に行っていた美姫さんへの詳細な聞き取り調査やそれを基にしたシナリオ構想を活かし、「伝えたいこと」を明確にすることで紙芝居制作に取り組むことができた。班員全員がそれに対して共通認識を持ちながら作業を進められたことで、「伝えたいこと」がブレずに完成までたどり着けたと考える。
　また、被災体験を紙芝居に落とし込んで作成することの難しさを実感した。シナリオの分量や言葉選び、イラストの絵のタッチ、使う画用紙や絵の具の種類等で検討することが沢山あった。どの素材を使うことが美姫さんの被災体験を伝えるうえで最適なのか試行錯誤を重ねて制作し、被災体験の中でもどの場面をイラストにして、どの内容をシナリオにするか、「伝えたいこと」に沿って選

びながら作業を進めることができた。今後も活動を進めるときは班員内で詳細な情報共有をし、円滑な連携をすることで、活動の目標への認識にズレがないように活動を続けていきたいと考える。

3.活動全体からの考察と今後の展望

今年は「メンバーの被災体験を紙芝居化するプロジェクト」を完結させることを目標に活動を進めた。震災遺構である「浪江町立請戸小学校」を視察して「浪江まち物語つたえ隊」の八島妃彩さんに聴き取りを行うだけでなく、それを活かして紙芝居のシナリオ、絵画の作成で試行錯誤を重ね、紙芝居「あの日私は」を完成させることができた。今後は、紙芝居実演の練習を継続的に行い、完成した紙芝居を色々な施設で披露し、多くの人々に私たちの紙芝居を届けていきたいと考える。また、震災伝承の活動をしている個人やグループの活動の視察を継続し、紙芝居だけでなく、今後の伝承活動へ繋げていく知見を深めていきたいと考える。

4.メンバーの振り返り

【G5079　後藤咲佳　3年】

今年度は美姫さんの体験を基に作成していた紙芝居を無事完成させることができて感無量である。活動当初は、私の班長としての準備が不十分で、班員のスケジュールを把握しないまま作業を進めてしまい、今年度の紙芝居完成は困難な状況に陥った。しかし、夏休み頃から班員のスケジュール調整をし、役割分担や作業の期限を明確化したやることリストを作成したことで、短い時間でも効率よく丁寧に作業を進めることができたと思う。紙芝居を完成させたことで、美姫さんが私たちに共有してくれた被災体験を形にすることができ、今後の世代に伝え継ぐための伝承媒体を残せたことに大きな意義深さを感じる。今後はこの紙芝居を多くの人々に届けるとともに、紙芝居以外の伝承活動にも注目して視察を続けながら活動を進めていきたいと考える。

班員のみんな、忙しいスケジュールの中で時間を見つけて紙芝居制作に一生懸命取り組んでくれて本当にありがとう。みんなのおかげで紙芝居を完成させることができました。来年度以降も、若い世代が次世代に震災の記憶を繋ぎ、今や未来を生きる人の尊い命を災害から守るために、活動を続けていきましょう！

【G5080　後藤美姫　3年】

今年度は視察は一回のみでしたが初めて訪れる場所であったため、とても学びになりました。また、実際に紙芝居を披露している方の活動のお話や紙芝居を披露していただき、機会を作ってくださった高野先生に感謝申し上げます。紙芝居の全体像やセリフの言い回しなどを吸収することができ、大きな収穫となりました。

そしてこの視察を経て、後期から本格的に制作を実施しました。下書きをとても素敵な絵で書いてくれたこのみさん然り、色塗りも全員で協力して作り上げました。自分一人ではなしえないことが全員でできたのはとてもうれしく、感慨深いです。人物と背景の絵の具のタッチの差など、素人ながら試行錯誤し色味を調節出来たと思います。みんなの思いが詰まった、卒業しても伝承媒体として残る作品をつくれて良かったです。来年には、いろいろなところで披露したいと思っています。次年度も伝承の意義を胸に活動を続けていきたいです。

【G5130　関町咲穂　3年】

今年度は昨年度の活動に引き続き、後藤美姫さんの体験を元にした紙芝居制作に本格的に取り掛かった。制作過程では、0から作品を作り上げることの難しさを実感させられることが多々あった。こどもが見て分かりやすい構図、原稿を考えることの他、アクリル絵の具を使うか水彩絵の具を使うか吟味するなど、手探りの状態で制作に携わった。そんな中でも、昨年度や今年度の視察で得た助言を生かしながら、メンバーのおかげでここまで紙芝居を制作することができた。今後は制

作した紙芝居の発表に向け、発表の機会の確保や紙芝居の改善といった活動を続けていきたい。

【G5179　星陽菜乃　3年】

今年度は、昨年度に引き続き紙芝居制作を行い、完成させることができた。イラストについては、昨年度制作したラフ画をもとに2年生中心で下書きをして、水彩絵の具で色を付けた。これまで見てきた紙芝居を参考にしながら色合いを決めていった。また、文章については視察で学んだことを参考に、言葉遣いや文字量を再構成した。

前期に実習があるなどで忙しい1年だったが、震災遺構視察と伝承活動をしている方への聞き取り、紙芝居完成と、充実したゼミ活動ができた。次年度では、実際に紙芝居を披露して、改善していきたい。

【G6183　深澤このみ　2年】

昨年度から引き続き紙芝居の実演や震災遺構を見学することで、伝承活動の大切さや難しさを学ぶことができた。また、今年度は次世代伝承班としての紙芝居作成に力を入れることができた。私は主に人物のデザインや下絵の制作に携わったが、当時震災を経験した人々がどのような表情をしていたのかということについて深く考えるきっかけとなった。また、彩色工程では下絵だけでは伝わり切らなかった感情やリアリティが加わり、メンバー全員の力で紙芝居が完成に至ったと強く実感した。来年度は紙芝居の実演や観客の反応を踏まえた紙芝居の修繕に力を入れていきたい。

【G6225　渡邊穂香　2年】

今年度は、昨年度に引き続き作成していた紙芝居を中心に行った。制作過程では、昨年度の視察や成果をもとに内容構成から表現方法まで、三年生を中心に一から作成した。視察は一回のみであったが、紙芝居の実演を実際に見たり、やりがいや工夫について直接団体の方から話を聞いたりすることで自分たちが行おうとしている活動の意義や表現の大切さを改めて認識することができた。今後は、完成した紙芝居の実演を様々な現場で行い、紙芝居を通じて東日本大震災の記憶や教訓を次の世代にも伝えていきたい。